

# 新入生オリエンテーションにおける獲得感と 大学生生活満足感との関連性について

心理学科 坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩

抄録：大学教育が十全に実践されるためには、その初動時における体制の確立が重要である。本研究では、大学新入生に対して行われるオリエンテーション（FOP: Fresher Orientation Program）において、学生が獲得したと感じるさまざまなことが、大学生生活における満足度にどのように影響しているかを実証的に検討した。120名の新入生を対象とした質問紙調査に基づき、FOPにおける獲得感にかかわる9つの因子（“一回生との親密化”，“情報獲得”，“気疲れ”，“企画充実感”，“バス充実感”，“自由時間充実感”，“上回生との親密化”，“教員との親密化”，“帰属感高揚”）、大学生生活満足度にかかわる3つの因子（“学業満足度”，“将来不安”，“交友満足度”）が抽出された。さらに共分散構造分析による因果モデルの検討の結果、FOPにおける獲得感が、大学生生活満足度を高めていること、またこうした獲得感には、教員との親密化や帰属感高揚が強くかかわっていることが示唆された。

キーワード：新入生オリエンテーション，大学生生活，満足感，大学教育

## 問題と目的

大学教育が十全に実践されるためには、その初動時における体制の確立が重要である。大学への入学は危機的な環境移行事態であり（古川・藤原・井上・石井・福田，1983）、大学に入学した学生は、新環境と相互交流し、大学におけるいわば「暗黙のルール」（大学生生活とはこういうものだという知識）を身につけていくことで新しい環境に適応することができる（白石，2003）。また、新入生が新環境に適応し、その後よりよい大学生生活を送るためには、早い時期から大学生生活に対する展望を持ち、4年間を過ごす上で基盤となる対人関係を形成することが望ましいであろう。このことに関して梅本（1992）は、大学入学後1ヶ月弱経過した時点で（男性においては入学後5ヶ月余り経過した時点でも）同じ大学に親しい友人のできている新入生は、それほど親しい友人のいない新入生より大学生生活に対して肯定的なイメージを抱いていることを明らかにしている。

以上のような「暗黙のルール」や大学生生活に対する展望、対人関係の獲得は、大学側にとっても教育を行う上で必要かつ好ましいことである。それ故、多くの大学では新入生に対して、大学・学部・学科に関する様々な情報を提供したり、学部の専門性を伝えるような初期教育を行ったり、同級・上級生や教員らと関係を結んだりするような場や機会を何らかの形で与えている。これらは新入生オリエンテーションや新入生研修会、あるいはフレッシュマン・キャンプなどと呼ばれ、学部や学科単位で宿泊するという形態で行われることもしばしばである。本研究ではこれを総称して“新入生オリエンテーション（Fresher Orientation Program 以下略してFOP）”と呼ぶことにする。

各大学におけるFOPの内容は、大半において伝統や経験、大学・学生などの諸々の条件によってその内容が決定されている。たとえば、学園紛争の中で秩序回復活動の一環として、学生側からFOPが提案され定着に至った事例（栗田，2001）や、FOPの内容が年数を経てアカデミックな方

向からレクリエーション志向へと変化した事例（白石，2003）などもある。学内での対人的な出会いの充実が「大学満足度」を高める（浜島，2003）ことに対する顕在的・潜在的な気づきがFOPの内容に反映された結果，そのような方向への変化につながったと推測される。

FOPの実施時期は入学後比較的早期であることが多い。大学生を対象とした親密化過程の研究では，出会って2週間までの相互作用がその後の友人関係の形成に重要となることが示されており（山中，1994），学生の人間関係形成に資するためにはFOPを入学後初期に実施する方が有効であることを，おそらく大学側が経験的に認識してきたのだとも考えられる。出野・関島・工藤・宇良・梶原・齋藤（2003）は看護学科における新入生オリエンテーションキャンプに対して期待することの自由記述から，以下の7つのカテゴリを抽出している。すなわち（1）他者との交流（2）プログラム内容への期待（3）自己の成長につながること（4）他者の考え方を知る（5）自己と向き合う（6）楽しく過ごす（7）自己表現，の7つのカテゴリである。そして，得られた自由記述の62.7%が，（1）他者との交流に分類される内容であり，参加者の多くが，他者との交流を新入生オリエンテーションキャンプに対して期待していることが示された。

このようにFOPは，大学において広く一般的に行われている行事であるにもかかわらず，研究としてはFOPの実践報告とそれを踏まえての考察（小林，1980；赤波江，1980；栗田，2001など）や，FOP自体に関する意義や効果を調べたもの（武田・井藤・岡本・小嶋・原，2004など）が多く，FOPの実施方法やその後の大学生活等への効果に関して実証的に調べた研究は，佐久田・奥田・川上・坂田（2003），奥田・川上・坂田・佐久田（2003），川上・坂田・佐久田・奥田（2004），坂田・佐久田・奥田・川上（2005）などを除いてほとんど見当たらない。大学に対する適応や満足

感に関する研究は見られる（最近では大久保・青柳（2003），大久保（2004）など）が，大学教育を実践していく上では，FOPのようなより具体的な企画をいかに運営するか検討することが非常に重要であると考えられる。とりわけ近年では，人間関係の形成を苦手とする学生が増加しているといわれており（古沢，2001），FOPが大学や大学生活にとって持つ意義はますます大きくなってきているはずである。そこで本研究では，FOPで獲得されるさまざまな事柄が，学生が大学生活を送ることにどのように影響しているかを，実証的に調べることを目的とする。

本研究で対象としたのは，一大学における特定のFOPであり，その調査結果は普遍的な要因と共に当該のFOPの内容にも左右されると思われる。その意味では，本研究は事例研究的な意味合いを含むものでもあり，調査対象とするFOPの具体的な実施内容について述べておく必要があるだろう。よってその内容を以下に簡潔に記す。

調査対象は本学の心理学科新入生に対して2004年4月中旬（授業開始後一週間経過時）に一泊二日の日程で行われたFOPである。参加者は，新入生120名とFOPの企画を実施する上回生スタッフ（約40名），学科教員（14名）であった。企画内容には，アドバイザー・グループ（新入生10名弱とそのアドバイザー教員1名からなるグループ）が交流を深めるための小規模な運動会や室内でのクイズ・ゲーム大会，学科への理解を深める説明会（教員が学科における4年間の大学生活全体の流れの具体例を画像で提示し，学科で学べること，身につくことを説明した），新入生同士や上回生が知り合う機会を提供する茶話会，フルーツフラワーパークという公立テーマパークでのバーベキューなどが含まれている。なお，往復の移動手段はバスであった。

本研究では，以上のようなFOPの実施内容において学生がどのようなことを得たと考えているか，質問紙を作成して実証的に分析し，FOPの

経験と大学生活への満足感との関連性を調べ、FOPが新入生とその大学生活に与える影響を数量的なデータから検討することを目的とした。こうした検討は、単にFOPをいかに企画するかに止まらず、大学における導入教育、学生支援の効果的なあり方などについても示唆を与えるものがあると考えられる。

## 方法

### 調査対象者

大阪樟蔭女子大学人間科学部心理学科に所属する一回生120名が調査に参加した。その平均年齢は18.3歳( $SD=0.5$ )であった。

### 調査実施時期

2004年4月中旬に実施したFOPから、あまり時間が経過しすぎないように配慮し、2004年5月中の授業時間内に質問紙調査を実施した。

### 質問紙の構成と質問項目の作成

以下の2種類の尺度を1冊の冊子として配付した。

- ① 2004年度版新入生オリエンテーション獲得尺度 [2004年度版G尺度] (42項目・“全くあてはまらない”1点～“非常によくあてはまる”5点の5件法)
- ② 大学生活満足尺度 [S尺度] (10項目・“全くあてはまらない”1点～“非常によくあてはまる”5点の5件法)

新入生オリエンテーション獲得尺度は、実際に新入生たちがFOPを体験してどのように感じ、何を得たと思っているかを知るための尺度である。この尺度は、「友人関係の輪が広がった」や「先生について情報を得た」など、一般的に新入生がFOPにおいて獲得すると予想される内容項目(佐久田他, 2003; 坂田他, 2005)を基本とし、当該FOPに特有の内容(たとえば「フルーツフ

ラワーパークでの自由時間が楽しかった」など)を加味して、構成された。

大学生活満足尺度は、佐久田他(2003)をもとに作成された尺度であり、「学びたいことが大学で学べている」や「大学で本当に親しい友人はいない」など、学生が学業や人間関係を含めて、どの程度今の大学生活に満足し、それが充実していると感じているか、を測定する尺度である。

### 手続き

調査対象者には調査目的が説明され、了解の上で調査に参加することが求められた。質問紙は授業時間内に一斉に配布され、調査対象者はその場で質問紙に記入した。この際、各調査対象者には各自のペースで回答することが求められた。すべての調査対象者の記入が終わった段階で、質問紙は回収された。

## 結果と考察

### 1. 新入生オリエンテーション獲得尺度

#### (2004年度版G尺度)の因子分析

一回生が本年度実施されたFOPからどのようなことを獲得できたと感じ、どのようなことに物足りなさを感じたのか、といった獲得感がどのような因子によって構成されているのかを捉えるために2004年度版G尺度42項目に関して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値1以上であることと解釈可能性から因子数を決定し、どの因子にも因子負荷量が.40未満の項目と複数の因子に対して負荷量が.40以上の項目を省き、再度因子分析を行い、再度項目を省くことを繰り返した結果、最終的に9因子を抽出した(Table 1)。

第1因子は、「友人関係の輪が広がった」「他の一回生と親しくなれた」などの項目において因子負荷が高く、主に一回生同士で親密になれたかどうかに関する因子と考えられるため、“一回生と

Table 1 2004年度版新入生オリエンテーション獲得尺度(2004年度版G尺度)因子分析結果

項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
第1因子：一回生との親密化 ( $\alpha = .82$ )									
友人関係の輪が広がった.	.85	.04	.24	.00	-.11	-.24	-.12	-.10	.05
他の一回生と親しくなれた.	.81	.07	-.01	-.14	-.04	.14	-.05	.02	.10
多くの人と親しくなれた.	.63	-.02	.02	-.01	.16	.00	.17	-.03	-.10
他の一回生との会話が楽しかった.	.53	-.03	.00	.06	.09	.23	.02	.06	.03
第2因子：情報獲得 ( $\alpha = .74$ )									
資格について情報を得た.	-.04	.84	-.03	.00	.03	.11	-.14	.10	-.09
就職について情報を得た.	.25	.81	-.29	-.02	-.02	.00	.00	.00	-.17
学外の生活(バイト、サークルその他)について情報を得た.	-.07	.60	.18	.03	.00	-.01	.11	-.03	.13
第3因子：気疲れ ( $\alpha = .76$ )									
気詰まりだった.	-.12	.07	-.77	-.04	.10	-.17	-.03	-.21	.08
気疲れした.	-.04	.06	-.65	-.06	-.19	-.04	.03	-.08	.10
会話に困った.	-.08	.07	-.61	.06	.08	.07	-.09	.08	-.09
第4因子：企画充実感 ( $\alpha = .75$ )									
朝の企画(犯人さがしゲーム)が楽しかった.	-.09	-.09	.00	.96	-.12	.03	.11	.05	-.20
夜の企画(先生クイズ)が楽しかった.	-.04	.04	.00	.77	.10	.12	-.23	-.04	.16
バスに乗る前の企画(名前おぼえゲームなど)が楽しかった.	.06	.23	.06	.52	.04	-.19	.14	-.10	.13
第5因子：バス充実感 ( $\alpha = .87$ )									
みんなでバスに乗って行けたのが良かった.	.00	-.01	-.04	-.02	.90	-.02	.05	.08	-.06
バスの中が楽しかった.	-.01	.00	.03	-.04	.84	-.03	.06	-.01	.06
第6因子：自由時間充実感 ( $\alpha = .83$ )									
利用した施設(フルーツフラワーパーク)が良かった.	-.07	.07	.05	.04	-.02	.90	.10	-.24	.11
フルーツフラワーパークでの自由時間が楽しかった.	.07	.04	.01	.02	-.02	.80	-.09	.09	-.06
第7因子：上回生との親密化 ( $\alpha = .79$ )									
上回生と親しくなれた.	-.05	-.08	-.01	-.01	.10	.01	1.00	-.11	.00
上回生との会話が楽しかった.	.20	.03	.15	.03	-.02	-.02	.67	.04	-.05
大学の施設について情報を得た.	-.25	.36	.09	-.11	-.10	-.01	.41	.18	.11
第8因子：教員との親密化 ( $\alpha = .76$ )									
先生について情報を得た.	-.08	.10	.22	-.04	.04	-.17	-.21	.71	.02
先生と親しくなれた.	-.04	.07	-.03	-.05	.02	.05	.15	.71	.03
先生との会話が楽しかった.	.12	-.06	-.16	.19	.04	-.04	.01	.61	.15
第9因子：帰属感高揚 ( $\alpha = .69$ )									
本学の心理学科の印象が良くなった.	.02	-.17	-.05	-.07	-.07	.02	.01	.13	.81
本学の心理学科の一員であるという意識が高まった.	.15	-.05	-.12	.10	-.04	.01	.10	.10	.60
本学の心理学科の雰囲気を感じられた.	-.02	.10	.24	-.08	.15	.04	-.11	-.11	.51
因子相関	II	.11							
	III	.37	.20						
	IV	.53	.09	.29					
	V	.42	.11	.31	.40				
	VI	.36	.04	.07	.41	.31			
	VII	.40	.41	.46	.42	.27	.22		
	VIII	.51	.16	.29	.51	.42	.25	.55	
	IX	.39	.36	.44	.47	.28	.17	.48	.45

の親密化”因子と命名した。第2因子は、「資格について情報を得た」「就職について情報を得た」などの項目において因子負荷が高く、情報の獲得に関する因子と考えられるため、「情報獲得”因子と命名した。第3因子は、「気詰まりだった」「気疲れした」などの項目において因子負荷が高く、FOPにおける親密化圧力に伴う緊張感・疲

労感に関する因子と考えられるため、「気疲れ”因子と命名した。第4因子は、「朝の企画(犯人さがしゲーム)が楽しかった」「夜の企画(先生クイズ)が楽しかった」などの項目において因子負荷が高く、FOPで実施した企画が楽しかったかどうかに関する因子と考えられるため、「企画充実感”因子と命名した。第5因子は、「みんな

でバスに乗って行けたのが良かった」「バスの中が楽しかった」などの項目において因子負荷が高く、道中の貸し切りのバスの中で過ごしたことが楽しかったかどうかに関する因子と考えられるため“バス充実感”因子と命名した。第6因子は、「利用した施設（フルーツフラワーパーク）が良かった」「フルーツフラワーパークでの自由時間が楽しかった」などの項目において因子負荷が高く、特別な企画を用意せずに娯楽施設で昼食を食べ自由に過ごしたことが楽しかったかどうかに関する因子と考えられるため、“自由時間充実感”因子と命名した。第7因子は、「上回生と親しくなれた」「上回生との会話が楽しかった」などの項目において因子負荷が高く、上回生とのつながりが出来たかどうかに関する因子と考えられるため“上回生との親密化”因子と命名した。なお、「大学の施設について情報を得た」という項目にこの因子の負荷が高かったのは、FOPの中でこうした情報が上回生からもたらされていることを示唆する。第8因子は、「先生について情報を得た」「先生と親しくなれた」などの項目において因子負荷が高く、教員との関わり方がわかったかどうかに関する因子であると考えられるため“教員との親密化”因子と命名した。第9因子は、「本学<sup>(1)</sup>の心理学科の印象が良くなった」「本学の心理学科の一員であるという意識が高まった」などの項目において因子負荷が高く、所属学科への帰属感が高まったかどうかに関する因子であると考えられるため“帰属感高揚”因子と命名した。

各因子に負荷の高い項目によって下位尺度を構成し、各下位尺度の内的整合性を検討するため $\alpha$ 係数を算出したところ、“帰属感高揚”尺度以外は $\alpha = .87 \sim .74$ と十分な値が得られた (Table 1)。“帰属感高揚”尺度に関しては $\alpha = .69$ と若干低いが、許容範囲であると判断した。そこで、調査対象者毎に各下位尺度の平均得点を算出し、それぞ

れ“一回生との親密化”得点、“情報獲得”得点、“気疲れ”得点、“企画充実感”得点、“バス充実感”得点、“自由時間充実感”得点、“上回生との親密化”得点、“教員との親密化”得点、“帰属感高揚”得点とした。各下位尺度得点の平均値をTable 2に示す。

Table 2 2004年度版新入生オリエンテーション獲得尺度 (2004年度版G尺度) 各下位尺度得点の平均値 (標準偏差)

	Mean	SD
一回生との親密化	3.87	(0.69)
情報獲得	2.28	(0.82)
気疲れ	2.67	(0.98)
企画充実感	3.25	(0.89)
バス充実感	3.02	(1.07)
自由時間充実感	3.58	(0.94)
上回生との親密化	2.99	(0.89)
教員との親密化	3.42	(0.78)
帰属感高揚	3.25	(0.72)

尺度得点範囲：1～5点

## 2. 大学生生活満足尺度 (S尺度) の因子分析

一回生が大学生生活に抱く満足や不満がどのような因子によって構成されているのかを捉えるためにS尺度10項目に関して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値1以上であることと、解釈可能性から3因子が抽出された。複数の因子への因子負荷量の絶対値が.40以上の項目を省き、再度因子分析を実施した結果をTable 3に示す。

第1因子は、「心理学科の授業内容に満足している」「大学の授業が面白い」などの項目において因子負荷が高く、大学での授業・学業に満足しているかどうかに関する因子であると考えられるため“学業満足度”因子と命名した。第2因子は、「これからの大学生生活が見えず不安である」「将来の進路について不安である」などの項目において因子負荷が高く、大学生生活を送っていくことへの不安、特に将来の見通しについての不安の有無に

(1) 実際の調査で使用した項目文においては、具体的な大学名を用いた。

Table 3 大学生生活満足尺度 (S 尺度) 因子分析結果

項目	I	II	III
第1因子：学業満足度 ( $\alpha = .74$ )			
心理学科の授業内容に満足している.	.86	.13	.03
大学の授業が面白い.	.64	-.10	.03
学びたいことが大学で学べている.	.56	-.13	-.06
第2因子：将来不安 ( $\alpha = .67$ )			
これからの大学生生活の先が見えず不安である.	.06	.86	.04
大学での日々は充実している. *	.07	-.55	.27
将来の進路について不安である.	-.09	.53	.20
第3因子：交友満足度 ( $\alpha = .62$ )			
学内の友人関係に満足している.	-.02	.01	.79
大学で本当に親しい友人はいない. *	-.02	-.11	-.60
因子相関	II	-.48	
	III	.49	-.32

\* のついた項目は逆転項目

関する因子であると考えられるため“将来不安”因子と命名した。第3因子は、「学内の友人関係に満足している」「大学で本当に親しい友人はいない」などの項目において因子負荷が高く、大学での交友関係に満足しているかどうかに関する因子であると考えられるため、“交友満足度”因子と命名した。

また、各因子に負荷の高い項目によって下位尺度を構成し、各下位尺度の内的整合性を検討するため $\alpha$ 係数を算出したところ、“学業満足度”では.74と十分な値が得られた。一方、“将来不安”、“交友満足度”はそれぞれ、 $\alpha = .67$ 、 $\alpha = .62$ とやや低い値であった (Table 3) が、許容範囲であると判断した。調査対象者毎に各下位尺度の平均得点を算出し、それぞれ“学業満足度”得点、“将来不安”得点、“交友満足度”得点とした。各下位尺度得点の平均値を Table 4 に示す。

Table 4 大学生生活満足尺度 (S 尺度) 各下位尺度得点の平均値 (標準偏差)

	Mean	SD
学業満足度	3.04	(0.75)
将来不安	3.28	(0.82)
交友満足度	3.78	(1.01)

尺度得点範囲：1～5点

### 3. 共分散構造分析による因果モデルの検討

FOP における獲得感が、大学生生活の満足感に影響を及ぼすという因果モデルを設定し、共分散構造分析による検討を行った。“獲得感”“満足感”を潜在変数とし、それぞれ先述の因子分析結果から得られた下位尺度 (獲得感：一回生との親密化・情報獲得・気疲れ・企画充実感・バス充実感・自由時間充実感・上回生との親密化・教員との親密化・帰属感高揚、満足感：学業満足度・将来不安・交友満足度) の得点を観測変数として用いた。モデル適合度、パラメータ推定値などを基準として、影響力の低いパスを調べたところ“自由時間充実感”および“情報獲得”の2つが該当したため、これらを削除しモデルの修正を行った (Figure 1)。最終的に得られたモデル全体の妥当性を検討するために、GFI、AGFI および RMSEA を算出した。その結果、GFI = .93、AGFI = .88、RMSEA = .05 といずれも良好な値が得られ、本モデルは十分採用しうるものであると判断された。なお、各潜在変数から各観測変数への影響指標については、いずれも.49～.72と高い値が示されており、潜在変数と観測変数との対応も確認された。

潜在変数間の関係では、“獲得感”から“満足感”に対して、.79という有意な強い正のパスが認められている。このことから、FOP における

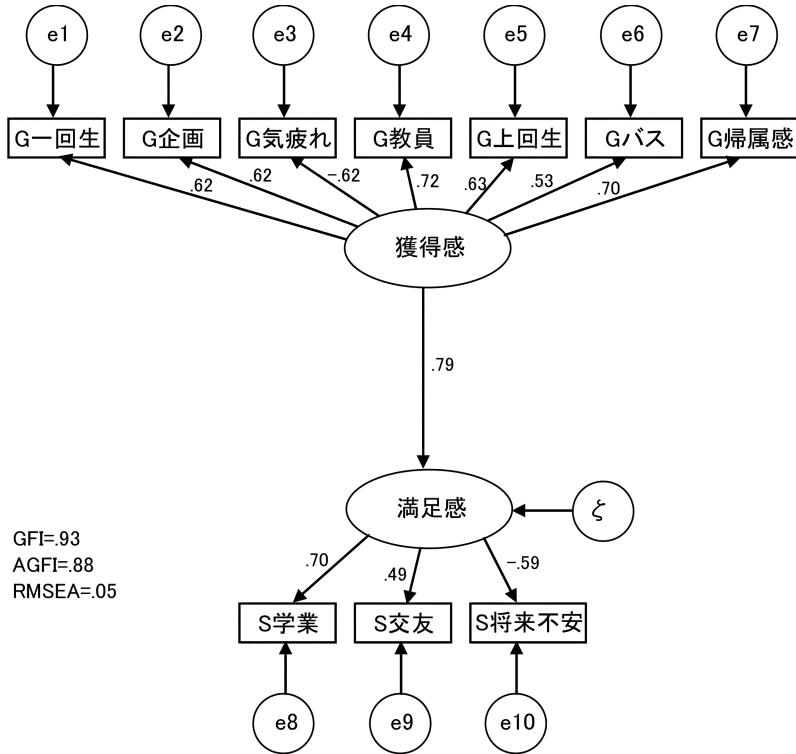


Figure 1 新入生オリエンテーション獲得感と大学生活満足感の因果モデル

獲得感は、FOP 自体の満足感を高めるだけにとどまらず、その後の大学生活の満足感をも高める可能性をもつものであると言えよう。

この理由の一つとして、FOP を通じての交友関係の広がり、深まりが挙げられる。大学生活の満足感とは、既に述べた通り、“学業” “交友” “将来” の3つの柱から成り立っていることが明らかにされている。FOP を通じて広められた、あるいは深められた交友関係は、場面限定的なものではなく、後の大学生活での交友関係につながっていくものであり、結果として大学生活の満足感をも高めるのだと考えられる。このことは、山口・和田（1997）の入学初期のソーシャルサポート（主に友人からのもの）が、その後の大学生活における孤独感に対して負の影響力を持つという報告とも整合的である。

本因果モデルにおいて、“自由時間充実感” お

よび“情報獲得”の2観測変数の当てはまりが良くなかったことは、それらがFOP自体の獲得感を高める要因ではあるものの、大学生活の満足感に結びつくような獲得感と関わるものではないことを示唆している。また、“獲得感”との関係が認められた変数のうち、係数が.70以上の値を示したものは“教員との親密化”および“帰属感高揚”の2変数であった。同様に、“満足感”との関係が認められた変数のうち、係数が.70以上の値を示したものは“学業満足度”のみであった。これらのことから、大学生活の満足感を高めるような獲得感と深く関わるFOP要因は、自由時間をどれだけ楽しく過ごすことができるか、資格や就職に関する情報をどれだけ得られるかといったことではなく、所属学科における学業生活に直接役立つような内容のものであると考えられる。

## 総合考察

本研究では FOP が、より具体的には FOP において新入生が獲得したと実感しているものが、彼女らの大学生活にいかなる影響を及ぼしているのかを検討することを目的として質問紙調査を実施した。調査の結果、FOP における獲得感が、大学生活での満足感を高めていることが示された。このことは、FOP における獲得感を高めることによって、大学生活における満足感をもまた、直接的に高めることが可能であることを示唆している。

それではいかなる FOP を実施することが、その獲得感を高めることに貢献しうるのかを、本研究の結果から概観したい。

本研究で注目すべきは、教員との関係に関する因子（“教員との親密化”）が、FOP における獲得感と強い関係を示していることである。本結果を踏まえるならば、FOP における獲得感、特に後の大学生活における満足感と結びつくような獲得感を高めるためには、教員と親密になることが可能であるような形態、企画で FOP を考えていくことが重要であろう。

一方、自由時間充実感および情報獲得は大学生活における満足感に強く影響を及ぼすような獲得感ではないことが示された。こうしたことは、自由な時間を充実させること、また情報を獲得することそのものは、その場での獲得感につながる可能性は否定できないが、大学生活全体に広がるような、獲得とは見なされていないことを思わせる。もちろん、こうしたその場の充実も、FOP そのものを企画として運営していく上では重要であり、こうした短いスパンの充実感と長いスパンを見据えた充実感の両方を射程に入れて企画を構成していくことが必要となろう。

以上が本研究の知見に基づく FOP 運営への提言であるが、一方で、本研究はいくつかの留意点をも含んでいる。以下に現時点で改善を目指すべ

き複数のポイントについて列挙する。

まず、大学生生活満足度を測定する尺度項目が少ないことが第一の問題として挙げられる。本研究は FOP における獲得感の影響が、大学生活におけるいかなる満足度に影響するのかを検討するための探索的な研究であった。そのため項目数も不十分であり、さらに、因子分析の過程において、採用される項目数も減少してしまった。本研究で得られた、“学業”“交友”“将来”の3つの柱を中心に、今後より充実した大学生生活満足尺度を検討していくこと、項目の見直しや追加を行っていくことが必要であろう。

第二に、本研究は5月のある時点での、新入生自身が振り返った FOP における獲得感と大学生生活満足度とを同時に測定したものである。これは言ってみれば「点」の研究であり、共分散構造分析によって因果的な関係が示されてはいるが、今後縦断的に FOP の前後での大学生生活満足度の変化を追っていくことによって、いわば「線」の研究にしていくことが必要となる。

第三に、本研究はあくまでも一大学の一 FOP を分析したケース研究である。先の議論に続けて考えれば、様々な大学で、また様々な形態の FOP を対象に、こうした調査を実施していくことにより、本研究をいわば「面」の研究の一部としてとらえていくことが可能となる。またそのことは必要であると言える。

以上のような点から、今後、多くの大学を対象とした FOP に関するデータを収集し、これら进行分析することにより、より効果的な FOP を企画運営して行くことが、大学生活の充実につながるファーストステップとなると予想される。

## 引用文献

赤波江春海 (1980). 上智大学における新入生のオリエンテーション—新入生の意識と指導体制— 厚生補導, 166, 16-24.



- 古川雅文・藤原武弘・井上弥・石井眞治・福田廣 (1983). 環境移行に伴う対人関係の認知についての微視発達の研究 心理学研究, **53**, 330-336.
- 古沢由紀子 (2001). 大学サバイバル 集英社新書
- 浜島幸司 (2003). 大学生活満足度 武内清 (編) キャンパスライフの今 玉川大学出版部, Pp. 73-90.
- 出野慶子・関島英子・工藤美智子・宇良俊二・梶原祥子・齋藤益子 (2003). 新入生オリエンテーションキャンプの評価 東邦大学医学部看護学科・東邦大学医療短期大学紀要, **17**, 34-45.
- 川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮 (2004). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (3) -出身校, 居住形態との関連から- 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **3**, 57-68.
- 小林啓美 (1980). 東京工業大学における新入生のオリエンテーション-類制度と新入生セミナーを中心に- 厚生補導, **166**, 9-15.
- 栗田充治 (2001). 事例紹介 学生と創る新入生オリエンテーション 大学と学生, **440**, 27-32.
- 大久保智生 (2004). 新入生における大学環境への主観的適応に関する PAC (個人別態度構造) 分析 パーソナリティ研究, **13**, 44-57.
- 大久保智生・青柳肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み-個人-環境の適合性の視点から パーソナリティ研究, **12**, 38-39.
- 奥田亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (2) -personality との関連から- 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **2**, 73-82.
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2005). オリエンテーション形態が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **4**, 75-86.
- 佐久田祐子・奥田亮・川上正浩・坂田浩之 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響 (1) -オリエンテーションに対する態度の基礎データ- 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **2**, 59-71.
- 白石義郎 (2003). 新入生の大学への適応 武内清 (編) キャンパスライフの今 玉川大学出版部, Pp. 106-117.
- 武田直仁・井藤千裕・岡本浩一・小嶋仲夫・原脩 (2004). 名城大学薬学部における新入生学外オリエンテーションの実施と評価-薬学導入教育のひとつとして- 名城大学総合研究所紀要, **9**, 13-18.
- 梅本信章 (1992). 大学新入生の適応について-自己の大学生活に対するイメージと友人関係との関連- 盛岡大学紀要, **11**, 27-38.
- 山口雅敏・和田実 (1997). ストレスとソーシャルサポートが孤独感, 疾病兆候, および大学満足度に及ぼす影響: 大学新入生についての縦断研究 東京学芸大学紀要 1部門, **48**, 239-248.
- 山中一英 (1994). 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, **34**, 105-115.

# The Relationship between the Gain in FOP (Fresher Orientation Program) and University Life Satisfaction

Osaka Shoin Women's University

*Hiroyuki SAKATA, Yuko SAKUTA,  
Akira OKUDA, & Masahiro KAWAKAMI*

## ABSTRACT

The purpose of this study was to investigate relationships between the gain students recognize to have got in their fresher orientation program (FOP) experience and their satisfaction with the university. Participants, 120 university freshers, were asked to rate items concerning the gain in FOP and those concerning university life satisfaction. The responses to the gain scale were analyzed by factor analysis and nine factors were extracted: “close relationship with freshers”, “information on university life”, “mental fatigue”, “program fulfillment”, “entertainment during excursion”, “free time fulfillment”, “close relationship with senior students”, “close relationship with professors”, and “sense of belonging”. Factor analysis of the satisfaction scale extracted three factors: “satisfaction with learning environment”, “anxiety for the future”, and “satisfaction with social relationships”. A covariance structure analysis was applied to investigate the relationship among the components. The analysis showed causal relationships between the gain in FOP and the university life satisfaction. The more gain in FOP one has, such as close relationship with professors and sense of belonging, the more satisfaction one has with university life.

**Key words:** fresher orientation program(FOP), student life, university life satisfaction, university education